IMAJ ニュース NO.53

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　昭和63年 7月25日
発　行　所　㈳国際MRA日本協会
発　行　者　住友 義輝
頒　　価　1部200円

INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN 〒113 東京都文京区千駄木4-13-4 TEL.03-821-3737㈹

# コー円卓会議 アメリカ キャンペーン レポート

San Francisco
Cincinnati
New York

## 欧米経済人と「本音の交換」

コー円卓会議アメリカキャンペーンは四月十八日から二十三日にかけてサンフランシスコ、シンシナチ、ニューヨークの三都市で開催された。スイスにおける二回の円卓会議（一九八六年及び一九八七年）並びに昨年の日本キャンペーンに続くこの〝巡業〟には日本及びヨーロッパから十七名が参加して、アメリカ側の経済人と〝本音の交換〟をくりひろげた。

### 一、日本人の悲観主義とアメリカ人の楽観主義

冒頭から「アメリカ問題」についてのアメリカ経済人の認識を聞き出したいとする日本側の意欲が強く、双子の赤字や競争力の強化といったアメリカの課題に関して積極的な質問と発言が相次いだ。アメリカ側は国全体の対外債務には無関心、或いはほとんど問題意識が無く、〝のれんに腕押し〟の感が強かったが、金融の専門家が数多く参加したニューヨークに至って厳しい現状認識に基づいた分析もやっと出された。元商務長官のピーター・ピーターソン氏は、

コー円卓会議アメリカキャンペーン・レポート　1P
アメリカ・キャンペーンに参加して/小笠原敏晶　4P
第12回MRA国際会議開催「心の国際交流 パートII」　9P
MRA小田原国際会議に参加して/ヒュー・ウィルキンソン　10P
「ヒマラヤの水道タンクの記銘」ネパールでの体験/石田　進　15P
スーダンが歩みゆく未来への道/アナイ・ケルエルヤン　17P
MRA文化講演会「私とMRA」/加藤シヅエ　19P

「数年後には一兆ドルにも達する債務を貿易収支の改善で埋めるのはとても不可能。結局ある程度のドルの下落と一種の管理貿易（自主規制）といったシナリオしかない。アメリカ国内では増税や防衛費及び社会保障費のカットといった思い切った手段しかなく、新しい大統領は就任直後にこうした不人気の政策を断行せねばなるまい。一方債務によってアメリカは従来の外交政策や第三世界へのリーダーシップを発揮できなくなるので、防衛や援助の負担を他の国々に担ってもらうしかない」と述べた。それでも、「市場の流れに任せれば解決する」（フェルドシュタイン前大統領経済諮問委委員長）といった意見や、輸入能力があるのもアメリカ経済の実力のうちといった意見も出て、心配性の日本に対する楽観的なアメリカという印象は拭えなかった。

一方、製造業に従事する人に対して弁護士の割合が圧倒的に多いとか、研究開発（R&D）担当者のほうがエンジニアよりも待遇が格段よいといったアメリカの事情もはっきり指摘され、貿易摩擦の根本原因の一つとして言及されると共に、抜本的解決のための国際的な産業分担のルール作りの必要性が日本側から説かれた。

## 二、市場開放と海外進出摩擦

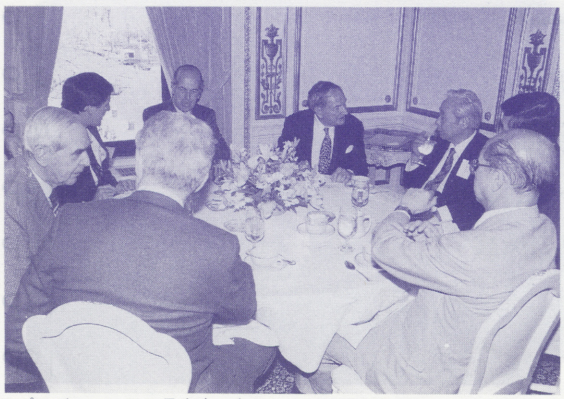
一方、日本に対してアメリカ側からの注文がもっとも多かったのは市場の開放で、金融市場の開放、農産物の自由化などが言及された。特に、牛肉とオレンジの自由化こそ日本の姿勢を海外に示すうえで最も効果的であるとの意見が双方から出された。日本の海外進出に関しては、部品の現地調達率が低いことや価格差を利用した市場進出に対する警告が出されたが、これに対してヨーロッパ側から、例えばアメリカには元々カメラ産業がなく、日本のカメラ産業の進出は摩擦にはならなかった筈であるし、また為替の変動に常時合わせて価格を調整していたのでは市場を喪失してしまうことになり現実的でない、といった擁護論も飛び出した。

これに対して、オーエン・バトラー氏（プロクター・アンド・ギャンブル社前会長）は、「アメリカの貿易赤字は主にアメリカ自身が作り出したものである」としながらも、一方で「かつて人種差別が廃止されたあとも差別の実体が続いたので、自社では一部の反対を押し切って販売員の三人に一人は黒人というルールを作ってから黒人の雇用が実行されるようになった。いったん採用すると黒人の労働の質は一挙に向上した。長年続いた制度を取り除くだけでは解決にならない。同様に、日本における輸入にしても購買品の五分の一は欧米製品というふうに決めて対処するというのも経済的にみて極めて現実的な対処の仕方である」と述べた。日米双方がここまで率直に意見をぶつけ合い、それにヨーロッパが謙虚な態度で関わるというのもこれまで三回の積み重ねによる相互の信頼があってならではのことであった。昨年の日本キャンペーンではジャパン・バッシングの急先鋒のようにみられたバトラー氏の真意は、実は世界全体の長期的な流れを見通した高い次元にあったことを、日本側も納得することができた。

## 三、途上国援助の民間ジョイント・イニシアティブ

今回は三つの都市を通して発展途上国援助の具体的方法論について活発な意見交換がなされた。

MIGA（多数国間投資機構）の初代長官に就任が予定されていた寺澤芳男野村證券副社長が参加したこともあって、途上国に対する民間融



●プラザホテルでの昼食会。右から松下電器山下相談役、キヤノン賀来社長、デビッド・ロックフェラー氏（米）、オリビア・ジスカールデスタン氏（仏）、（一人おいて）フレデリック・フィリップス氏（蘭）。

●シンシナチの朝食会で挨拶するルーケン市長。左はオーエン・バトラー氏（プロクター・アンド・ギャンブル前会長）、右はフレデリック・フィリップス氏（蘭）。

資や民間のジョイント・ベンチャーについて多くの提案がなされた。ベクテル社のベクテル副社長やシェブロン社のボニー副会長からは日米欧がジョイント・ベンチャーを組むことが相互理解と協力に大きく貢献すると体験に基づいた意見が出されたほか、結局は民間企業の意欲と努力にかかっているというのが一貫した流れであった。途上国に対する職業教育や技術移転の具体的なプログラムを話し合おうとの提案もヨーロッパ側からなされた。

又、これに関連して防衛分担を含む日本の責任分担やリーダーシップ分担への期待と要求が欧米側から出された。第三世界の問題は八月の第三回円卓会議での主要なテーマになると思われる。

## 四、シンシナチショック

シンシナチが今回含まれたのは、所謂中西部一帯がここ数年日本を初めとした外からの競争の激化もあって経済的打撃を強く受けたので、この地域の生の声を聞こうという理由であった。日本側はジャパン・バッシングも覚悟して当地入りした。

プロ野球観戦、オーエン・バトラー氏の農園のハウスパーティー、市長との朝食会、シンシナチ・ミラクロン社の工場見学など多彩なプログラムのハイライトは、創業一五一年目を迎えたプロクター・アンド・ギャンブル社（P&G）の本社見学であった。日本の企業よりも地域社会や開発途上国への貢献を立派に果たしている企業の姿を目の当たりにしたことが日本の参加者にとっての新鮮なショックとなった。企業経営の励みになったと同時に世界の実業家同士としての連帯意識を深めることにもなった。（六ページのアメリカキャンペーン報告会参照）

## 五、ジャパン・バッシング（叩き）からジャパン・プレイジング（称賛）へ

ニューヨークの昼食会に参加したロックフェラーグループの総帥デビット・ロックフェラー氏は次のように挨拶した。

「世界の平和と将来に対する唯一の希望は互いの協力にしかないと、長い間確信してきた。その意味で一九七二年に日米欧委員会を始めた。と同時に日本が単なる経済大国にとどまらず他の面でも力を発揮して欲しいとの願いがあった。今回のコー円卓会議と同様、最近の日米欧委員会でも日本側の極めて率直な意見と意欲というものが見受けられた。ヨーロッパ側の議長が今回はジャパン・プレイジングではなくジャパン・バッシングだったと述べたほどだった。日本は最近相当やることはやったので今度はアメリカとヨーロッパが努力すべき番だと考えている。

この二つのグループが目指しているものは同じであり大きな励みである。コー円卓会議グループの努力に敬意を表し健闘を祈りたい」。

## 六、プラザ・メモ

ニューヨークでの円卓会議は、一九八五年に円高の引き金となった五カ国蔵相によるプラザ合意がなされたプラザ・ホテルで行われた。率直な中にも信頼と和やかな雰囲気で会議が進み、会議後の夕食会では自然発生的に参加者による手品、ゲーム、そして歌の交換が起こった。この光景を見ていた勤続三十年というホテルの女性従業員が、これほど和やかで気持ちが一つになった国際グループは今までこのホテルに迎えたことがないと語った。また円卓会議に初めて参加したアメリカ人も、数多い国際会議とは違った特別の雰囲気の中で率直な意見交換ができたことに感謝を表していた。

今後の円卓会議グループの性格づけについての話し合いも行われたが、「触媒」として啓蒙活動を主として継続し、第三世界やNIESからの参加も含めてじっくりと輪を拡大することも検討することとなった。日本人参加者は「プラザ・メモ」をまとめ、日本国内の改革にも継続して取り組んでいく意欲を表明した。

第三回のコー円卓会議は八月二二日から二五日までスイス・コーで開催される。

●チームの帽子をかぶって大リーグ、シンシナチ・レッズに声援を送る一行。

# コー円卓会議アメリカ・キャンペーンに参加して

**小笠原敏晶** ジャパン・タイムズ会長

昭和六年東京都生まれ。米国プリンストン大学大学院卒業。昭和42年、米国ITW社との技術援助契約により株式会社ニフコ設立。代表取締役社長就任(現)。昭和58年、ジャパン・タイムズ社代表取締役会長就任(現)。本年5月、日本とフロリダ州との協力推進に功績があったとしてフロリダ州立大学と南フロリダ大学より名誉博士号を授与された。

## 世界が期待する日本のリーダーシップ

昨年までの日米関係を一言で表現するならば、「ジャパン・バッシング」が主流で、貿易インバランスの根源は、日本社会の閉鎖性、非関税障壁、シェア優先のダンピング政策、あるいは強いドルに依存した集中豪雨的輸出攻勢といった、文字通りの「ジャパン・プロブレム」であったと言えます。

ところが、今年に入り、ダボスでの円卓会議をはじめ日米欧委員会、そして、今回のアメリカ・キャンペーンを通して、私が肌で感じたことは、こうしたジャパン・バッシングは、日米貿易インバランスの解消には、何の役にも立たないといった雰囲気へと大きく変化してきていることでした。

第一日目のサンフランシスコで、そのことを私が申し上げましたところ、それは楽観的過ぎるのでは、との一部の意見もありましたが、最終のニューヨークでの会議が終った後では、大部分の方が同感だというほどに状況は変化してきています。

話し合いを通じ、双方の言い分に耳を傾け、それぞれの素晴らしいところは認め合うことにより、理解を深め、最善の解決策を見い出してゆこうという気運が出てきたことは、遅まきながら、良い方向に向ってきたと思うと共に、お互いに冷静になってきたなあという印象を受けたものでした。

こうした気運が盛り上がってきているから余計に、国際社会における日本の果すべき役割が大切になってきているわけで、国力に見合った応分の負担と貢献といった面での「日本のリーダーシップ」を世界の国々は大きく期待しているのです。さもなければ、ジャパン・バッシングへ逆戻りしてしまう恐れがあります。

日本の国際社会での果すべき役割は、いろいろな局面で求められていますが、私は防衛負担と累積債務問題で我が国のハッキリした姿勢を示すことが肝要であると考えます。

軍事的な役割を果すことは不可能なので、せめて防衛分担という形で貢献してゆくことは、今の日本に求められている世界の声と言えましょう。また、累積債務の問題についても、特に南米は歴史的にアメリカ市場だったことを考慮すれば、この問題の解決が、結局は、アメリカ経済の回復に貢献するものであり、ひいては、世界経済の安定のために重要な課題でもあります。

また、ご存知のようにアメリカは、世界最大の債務国になっているわけですが、私はニューヨークの会議でアメリカの外貨建てによるボンドの発行(レーガン・ボンド)を真剣に検討すべき時期に来ていることを申し上げたわけですが、残念ながらすぐ休憩時間に入ってしまい、真剣な討議はできませんでした。

しかし、元商務長官のピーター・ピーターソン氏はその会議を離れる際に、私に、「確かにあなたの言う通りだ」と言い残して去りました。

## 経済大国「日本」の現実

このような日米間の国際経済問題を議論した後、アメリカの各地を訪れていつも実感することは、数年後には一兆ドルにもならんとする借金を抱えた国でも、基軸通貨の国というのは何よりの強みであって、国民の生活は相変わらず豊かであるということです。

プロクター・アンド・ギャンブル社前会長のオーエン・バトラー氏のお宅に招かれた際も、素晴らしい邸宅で、贅沢な生活を楽しむ一方、地域社会に対する貢献も積極的にされており、精神的にも、物質的にも大変豊かな生活を送っておられます。

それに引き換え、世界一の金持ちといわれている我が国は、赤字国債を出し、国民の生活は、うさぎ小屋（最近は犬小屋ぐらいに昇格したようですが…）さえ、大都市では手にいれることが難しく、五パーセントに満たない農民保護のために、世界一高い食料品を買い求め、地域社会への関心など持つ余裕さえなく、自分の生活に精一杯といった現実は何と皮肉なことでしょうか。

債権大国・日本としての実感を、国民一人一人が生活の中で味わえるようになれば、自発的に国際社会への貢献もグローバルな視点から考えられるようになるのではないでしょうか。

コー円卓会議は、民間レベルで、個人の立場からフレンドリーに話し合えるユニークな国際会議なので、どんなに規模が大きくなろうとも、この会議の特徴であり、魅力でもあるコーの精神を失わないことが大切です。

私もこれまで各種の国際会議に出席してきましたが、今回のアメリカ・キャンペーンのように、サンフランシスコ、シンシナティ、ニューヨークの三都市を一週間かけて、参加者の皆さんと、寝食を共にしながらキャラバンを組んだ経験は、楽しく、よい思い出ともなりました。

事務局の皆さんの献身的なご努力と、素晴らしい通訳の皆さんのお力添えで、このキャンペーンが大成功に終ったことを紙面を借りまして御礼申し上げます。

## アメリカ・キャンペーン参加者リスト

**■ヨーロッパ**

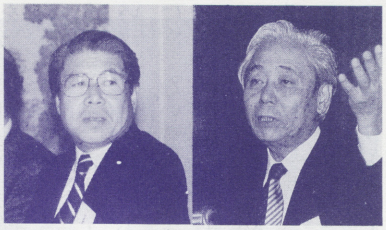
フレデリック・フィリップス（オランダ）
（フィリップス社元会長）
ハリット・ワグナー（オランダ）
（シェル石油前会長）
フレデリッヒ・ショック夫妻（西ドイツ）
（ショック社社長）
オリビア・ジスカールデスタン（フランス）
（ヨーロッパ経営大学院副理事長）
ネビル・クーパー夫妻（イギリス）
（トップ・マネージメント・パートナーシップ会長）
ピーター・フグラー（スイス）
（インター・アリアンス銀行頭取）

**■アメリカ**

ライリー・ベクテル
（ベクテル・グループ社副社長）
デニス・ボニー（シェブロン社副社長）
マイク・ブリーバー
（アメリカン・エア・リクイデ社社長）
リナルド・ブルトーコ（ドラソン社社長）
ミロン・ドュベイン
（SRーインターナショナル会長）
ロバート・イーグルストン
（キャピタル・グループ会長）
ウェルドン・ギブソン
（SRーインターナショナル相談役）
ジョージ・マカウン
（マカウン・デ・リューウ社経営パートナー）
ロナルド・ネイター
（SRーインターナショナル専務理事）
リタ・リカルドキャンベル
（フーバー研究所教授）
ホーンズビー・ワッスン
（SRーインターナショナル元会長）
リチャード・アーファー（アーファー社会長）
オーエン・バトラー
（プロクター・アンド・ギャンブル前会長）
リー・ホスキンス
（クリーブランド連邦準備銀行頭取）
チャールズ・パリス
（スペシャル・ディスパッチ社会長）
フランシス・スタンカード
（チェイスマンハッタン銀行副頭取）
ウィリアム・ティリンガスト
（センコープ社会長）
ステフン・ボスワース
（米日財団理事長　元フィリピン駐在大使）
ロバート・コロッツイン（コンプラン社社長）
デビット・デ・リューウ
（マカウン・デ・リューウ社経営パートナー）
ジョン・モーア
（エグゼクティブ・コンペンセイション・プランズ社副社長）
ピーター・ピーターソン
（ブラックストーングループ会長　元商務長官）
リチャード・ピートリー（米日財団前理事長）
デビット・ロックフェラー
（ロックフェラーセンター会長）

**■日本**

井村　昭彌（アメリカ松下電器社長）
小笠原　敏晶夫妻
（ジャパンタイムズ会長　ニフコ社長）
岡村　昇（本田技研常任相談役）
尾関　雅則夫妻
（鉄道総合技術研究所理事長）
賀来龍三郎（キヤノン社長）
阪本　勇（住友電工相談役）
住友　義輝夫妻（住友電工常任監査役）
寺澤　芳男（野村證券副社長）
松岡　紀雄
（神奈川大学国際経営研究所教授）
御手洗冨士夫（キヤノン・USA社長）
山下　俊彦（松下電器相談役）



# アメリカキャンペーン
# 日本側参加者の報告

## ●アメリカは双子の赤字の解決を

賀来龍三郎

「日米欧円卓会議」と銘打っても、アメリカ側の気運がいまひとつ上がっていないようなので、今回アメリカに乗り込んだ。

サンフランシスコではジャパン・バッシングが影をひそめていたので和やかな雰囲気の中で話が進んだ。しかし、我々が関心を抱いていた双子（貿易、財政）の赤字に対してアメリカ側は問題の所在すら認識がないという感じで失望した。

シンシナチのプロクター・アンド・ギャンブル社を訪問して、利益は社員に還元し、終身雇用制も取り入れているなどして日本の企業以上に日本的な企業であることに驚いた。黒人の雇用にも力を入れているとのことだ。バトラー元会長に「日本と同じような企業ですね」と感想を述べたところ「百五十年前から続けているのだから、日本の先生のようなものです」という答えが返って来た。

ニューヨークでは幾人かの大物と合う予定だったのが、先方の都合などで、期待していたほどのコミュニケーションが図れなかったことは残念だった。地理的にニューヨークはヨーロッパ側を向きがちなゆえにこういう会議に熱心ではないのかもしれない。

前大統領経済諮問委員会委員長のフェルドシュタイン氏は双子の赤字について、「年間で三百億ドルずつ貿易赤字は減ってゆき五年もすれば無くなるから、心配はいらない」と非常に楽観的だった。フェルドシュタイン氏のような方に、ドルは百円を割ると言ったら、影響が大きくて困る、と言ったのだが、「あくまでも学問的な予測」と取りつくしまもなかった。しかし、アメリカ人全てが楽観的に見ているわけではなく、元商務長官のピーター・ピーターソン氏など双子の赤字について直剣に取り組んでいる。また、デビッド・ロックフェラー氏も日本をよく知っている方で、日本を叩くというよりもアメリカ自身の経済を心配され、双子の赤字の解決が大事であることを語っていた。

最初の円卓会議で焦点になったのはインバランスの問題、昨年あたりから「企業の倫理」が加わり、今回のキャンペーンでは発展途上国との関係も討論にのぼっていたので、おそらく今年のコーでの焦点にもなるだろう。

（キヤノン社長）

## ●松下の上をいくアメリカのエクセレント・カンパニー

山下俊彦

日本とアメリカの優秀企業は対等だなどというのはとんでもない話で、アメリカのエクセレント・カンパニーは日本の会社の、少なくとも松下電器よりは上をいっている。それを我々が認識しないことには、日米の貿易摩擦は解消しない。

企業が現地へ進出し、雇用創出、技術移転や産業移転をすることが貿易摩擦の解消につながると思いがちだが、それだけではいけない。その地域社会に対するコミットメント（かかわり）のレベルを高め、現地企業として根ざすことが重要だ。

真にその国に受け入れられる企業になるため、シンシナチのプロクター・アンド・ギャンブル社で学んだことを、社内でもできるだけ啓蒙するように心掛けていきたい。

（松下電器相談役）

## ●現実の政治に見たアメリカン・デモクラシー

尾関雅則

初めて訪問したオハイオ州シンシナチ市の印象が強く残っている。

着いたその日にベースボール観戦招待を受けアメリカ的な街かと思ったら、翌朝、外に出て見てヨーロッパ風情のある清潔な都市という感じを持った。

朝食を共にした若い市長によれば、二百年の歴史を持つシンシナチの橋や道路など公共建築物がかなり痛んできている。民間の会社などで構成される機関に対策を練らせたところ、市民の所得の〇、一パーセントを税金として十年間徴収してその財源か

ら順番に設備の再建に使っていくという答申が出された。しかし、税金をかけるというのは議会の権限ではないからそれを市民投票で明日決めるという。そして、これが通るのは間違いないということであった。日本人にしてみれば、新しく作った税金がそんなに簡単に通るものなら苦労はしないと思うのだが、教科書に書かれている「デモクラシー」が現実の政治で行われている。市民が全員参加しているアメリカの偉大さにつくづく感心させられた。

（鉄道総合技術研究所理事長）

## ●自惚れてはいけない日本企業

**岡村　昇**

期待と不安とが入り混じったアメリカ行きだったがジャパン・バッシングは収まっているようだった。サンフランシスコでは日本の企業と提携しているところが多いので、業績が上がってきているのがその理由の一つだと思う。また、日本が遅ればせながらもインバランスの是正に動きだしたことを感じとっている。製造業の重要性も再評価されはじめている。

しかし、日本に対する不信が消えたわけではない。それはアメリカ人の言葉の端からも感じられた。実績の積み重ねが不信感を拭うと信じる。もう少し早く手を打っておけば尚更良かったという気がした。

後から市場に入ってゆき、価格操作をしてシェアを広げてゆくという日本のやり方に対する不満がシンシナチでは表明された。更にNIES勢力が入ってきたので、アメリカ側も色々と対策を練っている。

アメリカでは大国としての日本に、安全保障などを含む国際的責任を担って欲しいという意見が多い。難しい問題ではあるが、この問題に真剣に対応していく必要がある。

アメリカにも日本と同じように優良企業はたくさんある。日本の企業は自惚れてはいけないと感じた。

（本田技研常任相談役）

## ●徹底的に話し合い誤解を解消しよう

**阪本　勇**

一般の会合では、限られた時間の中で喋るだけに終わってしまい、完全な理解がないまま自分なりに文書を解釈して持ち帰ることが多い。しかし、昨年御殿場で開かれたMRA会議に参加した時に夜遅くまで徹底的に意見を戦わせ、お互い納得したという経験があった。今回のMRAアメリカ行脚もその期待を抱いていたのだが、徹底的に話し合えなかった気がする。

今から三十数年前、スペインの片田舎で「日本では電車が走っていますか？」と聞かれて唖然としたことがある。ニューヨークなどの大都会では別として、アメリカでもちょっと田舎になってしまうと日本に対する知識は低いと思う。そういう人々がワシントンの政治家や特殊な利害を持った人々に躍らされて、日本に対して不満をつのらせるのではないかと思う。

日本は情報社会が発達してきているので、アメリカほど大衆が躍らされることはない。したがって牛肉、オレンジの問題にしても象徴的な問題として捉えている。しかし、大勢には影響がなくとも、こうした個別の問題を一つ一つ解決していかない限りはギクシャクとした日米、日欧関係は改善されない。

我々の世代は外国人崇拝というものがあるので、舶来品を好む傾向がある。海外旅行者もあれほどの海外製品を買って帰って来る。したがって、アメリカ人が言う「日本の大衆は外国製品を排斥している」ようなことはない、と思っていたが、若い人たちは安い方が良いという考えのようだ。主婦の方々も国産品愛好という古い「愛国心」は捨てて、買った物の十個のうち一つは外国商品というようにしてみたらどうだろうか。

また、輸入オレンジは農薬が多い、という声が強いが、実際には日本のみかんの方が多かったりしているように、些細なことでも様々な誤解が両国間に存在している。誤解を解消するために財界人は財界人同士、民間人なら民間人同士で徹底的に話し合うことの重要性をつくづく感じている。

（住友電工相談役）

## ●外に対して自らを正しく伝える必要性

**寺澤芳男**

国と国との関係において、相手に対して一つの概念ができてしまうとなかなか軌道修正が難しい。例えば、野村證券がニューヨーク証券取引所に進出するのが簡単だったのに比べ、メリルリンチの日本に対する進出は難しかった。結局日本の金融市場は閉鎖されているということになってしまった。これは日米の互恵主義といった観点からは説明がつかないが、外国企業も日本の会社と同じく内国民待遇を受けていると説明したら納得してもらえた。日本では確かにビ

ジネスマンが政府との対応に時間をとられるし、閉鎖されていることが多いが、そういう状況の中でビジネスマンなりに努力していることを、外に対して自ら正しく伝える必要がある。

そういう意味で今回のキャンペーンは、決議や声明を出すことよりも、じっくり本音で対話をくり返したことに大きな価値があった。又、このグループがとてもさわやかな人々の集まりであることが印象的であった。

（MIGA長官）

## ●地域社会に貢献する アメリカ企業

松岡紀雄

シンシナチの工作機械の有力企業の会長からココム問題についての質問があったので、自分は次のように答えた。

「東芝機械のスキャンダルが自由世界の安全に脅威を与えたとしたならば、日本人の一人として申し訳なく思う。ただ、東芝機械が輸出する以前から既にソビエトの原潜のスクリュー音が小さくなっていたのは、アメリカの政府機関も認めた周知の事実である。また、東芝と東芝機械はそれぞれ独立した会社であるのに、その区別をつけずに報復するというのはフェアではない」

それに対してこの会長はズバリ、「ヨーロッパからの部品で既に以前からスクリュー音が下がっていたのは我々はよく知っている。ただこのことが新聞には載らない」と仰言って下さった。ニューヨークの会議でもアメリカからの参加者から、アメリカの政治ゲームとして東芝が利用された、という声もあった。

アメリカでは企業とコミュニティー（地域社会）の結びつきが深い。地域の問題は国に任せるのではなく民間企業や市民が責任をとろうというのである。シンシナチでは企業や個人なりがボランティアとして街の設備の再建に加わっている。妊娠してしまった中学や高校の女生徒だけを預る公立の学校があるが、企業がこれらの学校と養子縁組をし、単にお金を寄付するだけではなく社員をそのような学校に送りこんで特別の授業を行ったりしている。さらに驚いたことには、企業のトップクラスは年収の十五パーセントを慈善寄付している。もちろん、生活環境の違いがあるから、日本の企業にも同じことをしなさいと言っているのではない。

日本の企業がアメリカから非難されるのは、●易収支の問題だけではなくて企業、経営者の行動が噛みあっていないからだと思う。この実情を認識して対処していかなくては、貿易収支をいくらいじっても、本質的な解決にはならない。

また今回は、国際社会における日本の責任が問われた。発展途上国にどのように手を差し伸べ、世界の平和安泰に如何に寄与していくか、ということもう少し詰めた研究が必要である。

今、世界一の債務国はアメリカになっているが、それに対し心配はいらないという見方もあるが、実態はどうであるかということを専門家の研究をふまえて今年のコーの円卓会議で話し合いたい。

（神奈川大学国際経営研究所教授）

## ピーター・フグラー（スイス）

**ヨーロッパ側参加者の一人であるフグラー氏からも次の感想を頂いたのでご紹介したい。**

アメリカ人の長所は、非常にオープンで正直なところだと思う。共和党の元閣僚であるピーター・ピーターソン氏などが、悲観的な「アメリカの将来」について話していたことがそれである。

貿易や為替などの問題にしてもアメリカ人は物事を広く考えている。日本との競争、NIES●台頭で苦戦を強いられているが、今回会った人たちは、それがかえってアメリカにプラスになる、と話していた。高品質で低価格の日本製品がアメリカを活性化させるという意見もあった。そこがヨーロッパと違うところだ。

今、ECは保護主義的になってきている。ECの市場はクローズド・マーケットになり、EC内の資本と労働力でうまくやって、外部からのものは必要ない。というような見方が強い。

また、アメリカ社会の中で、日本に理解を示している人たちが多くなってきているし、次の時代を担う若者も日本のことをよく知っている。これに対し、ヨーロッパでは日本を知っている人が少ない。ただ、アメリカのパブリック・オピニオンはヨーロッパに比べ変わり易く、昨日の敵が明日の友になることもあれば、その逆になることもある。

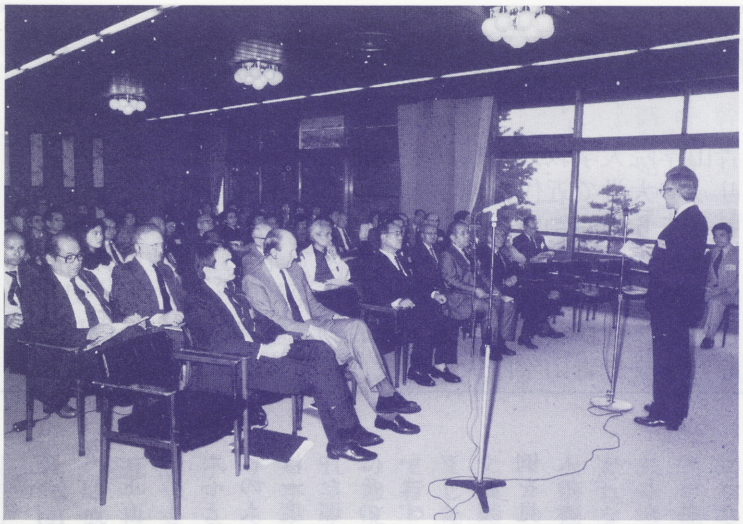
相手国の代表的な人物と知り合えるというのが、コー円卓会議の利点である。大切なのは一対一の人間関係であるから、これからもその強化に努力してゆきたい。今後の課題としては、構成メンバーの資本力、技術力、思考力を活かした具体的なプログラムや仕事を担うことだと思う。

（インターアリアンス銀行頭取）

# 第十二回MRA国際会議開催

## ――テーマ「心の国際交流 パートII」――

第十二回MRA国際会議が、「心の国際交流パートII」のテーマで、去る五月二十八日から六月七日にかけて、小田原や大阪・東京などで開催されました。私達の身の回りで、留学生、海外帰国子女、外国人労働者問題など、静かに、しかし着実に国際化が進行しています。異質なものを排除するのではなく、受け入れる広い心、そして、そこから学ぼうという姿勢があってこそ「心の国際化」が可能になるとの認識のもと、MRAならではの本音の話し合いが、ビジネスマン、教育者から主婦、学生、在日外国人に至るまで、様々な人々を交えて行なわれました。



昨年に引き続き「心の国際交流」のテーマで行われた今回の会議には海外からの代表に加えて、留学生、ビジネスマン、そしてインドシナ難民など様々な形で日本に滞在している外国人の方々も参加され、日本の国際化の在り方が多様な角度と視点から論議されました。「何故『国際』とわざわざつけて日本人と外国人を区別するのか。人間同士の『心の交流』でいいではないか」という問いかけも外国人参加者からなされ共感を呼びました。

## 日本で決心したこと

ソン・スーベール

私達カンボジア人にとって日本は明らかにアジアの一員だが、日本人自身はそのことをはっきりと自覚していないと聞かされ意外な気がした。

ベトナムがカンボジアに侵入した1978年以来、共産政権の下で圧政や飢餓に苦しめられてきた私達カンボジア国民に対する日本政府と日本国民の支援に感謝したい。日本政府が動く前に、すでに民間の方々、例えば相馬雪香さんが始められた「難民を助ける会」がカンボジア難民のみならずラオス難民、ベトナム難民に対する支援を一般の国民の方々にアピールして頂いたことは特に忘れられない。

カンボジアからの撤兵を求めて日本政府とASEAN諸国による経済制裁がベトナムに加えられている。このような経済的、外交的、そして政治的圧力が国連の場におけるベトナムの占領を終結させる動きに活かされている。現在インドネシア政府はカンボジア問題の政治的解決に向かって動いているが、日本政府も経済制裁を解除することなく、ベトナムが平和交渉のテーブルにつきベトナム軍の全面撤退が実現するよう影響力を行使して頂きたい。

日本はこれからの世界の様々な分野でリーダーシップを取っていくと見られている。日本人の他のアジア諸国に対する優越感という話を聞いたが、日本がこれから世界の中でより一層の役割を果たすためにどのような態度が求められ、どのように自身を変革しなければならないのかを考えて欲しい。

私は今回のキャンペーンに参加して、自分の両親、年長者、或いは同僚達に対してとっていた大変無礼な態度や過ちをバンコクに戻り次第謝ることを決心した。MRAで学び毎日肝に命じなければならないのは、自分自身の態度や癇癪を常に正していくということだ。自分で自分自身を助けようとしなければ他の人に助けを求めることも出来ない。

民主カンボジア連合政府ソン・サン首相秘書官及びKPNLF（クメール人民民族解放戦線）赤十字委員長を務める。一九四二年生まれ。ソルボンヌ大学で考古学を専攻する。

# MRA小田原国際会議に参加して

ヒュー・ウィルキンソン

青山学院大学教授。1926年5月、ロンドン生まれ。ケンブリッジ大学で近代言語学を専攻。卒業後、MRAフルタイムとして6年間働いた後、55年に海軍の一員として初来日。61年まで青山学院大、学習院大などで非常勤講師を務め、常陸宮殿下、島津貴子さんなどの英語教師も務めた。61年から67年まで伊藤忠ロンドン支店勤務の後、67年に再び来日し72年まで青山学院大助教授、72年より現職。

## 友情とは与えられるものではなく与えるもの

正直に言って、今回の小田原会議のテーマである「国籍や国境を超えた心と心の国際交流」がこれまでの私の人生で難しいと感じられたことは一度もありません。それは私が育った環境によるところが大きく、私はそのことを両親にとても感謝しています。私が家を出た後も、母はアフリカや他の様々な国からの留学生や看護研修生を家庭に受け入れて面倒を見ていました。母は、アフリカ人の赤ちゃんの名付け親でもあります。

しかし、一般の人々に心を開くということは私にとってまた別の問題でした。私は読書や楽器演奏など一人でやれることが趣味で、スポーツなどは得意ではなく、それを楽しいと思ったこともありませんでした。私の妹は皮肉なことにスポーツがとても得意で、家の中では私より男の子らしかったのです。

やがて私はパブリック・スクールに入り、全寮制の学校での共同生活が始まりました。そこでもやはりスポーツの出来る子が人気者であることを知り、自分をとても情けなく思い、孤独感に見えました。劣等感すら抱いた私は、心を閉ざした内気な少年になりました。

ある時、MRAを知る学校所属の牧師さんから「貴方は神様を信じていますか？」と聞かれました。「はい。信じています」と答えた私に彼は「この世界を創造した神様を信じているなら、神様は自分が創った世界に対する計画をお持ちだということも信じられるでしょう。そして神様がこの世界に対する計画をお持ちならば、きっと貴方の人生に対する計画も持っておられるはずではないですか」と言われました。

彼は、MRAの四つの基準に従って自分自身を見つめ直し、自分に対する計画を示して下さるように神様に尋ねることを教えてくれたのです。

私にとって最も大きな発見は、内気になったり、自分を情けなく思ったり、みんなが自分の友達になってくれるのを待っていたりすることは間違いであり、みんなも自分が彼らの友情を必要としているのと同じくらい自分の友情を必要としているのだということでした。神様は自分が積極的に人と付き合い、みんなと友達になることを望んでいらしゃいました。

第二次大戦の直後、私は海軍の一員として日本に来ました。そして日本人が自分よりもっと内気な人々だということを発見したのです！　私はこれこそ自分が積極的に振る舞い友達を作るいいチャンスだと思いました。九ヵ月間の日本滞在中の様々な体験や、日本人との間に培った友情により、私は日本に戻り、そこで暮らそうと決心したのです。

## 無口な日本人

さて、人々が心を閉ざしてしまう原因にはどんなことがあるでしょうか。私の場合それは、一つには様々な恐れの感情から生じると言えるでしょう。間違いを犯すことに対する恐れ、自分が他人にどう思われているのかということに対する恐れ、日本語で会話をする時、その内容を理解出来ないのではないかという恐れなどです。特に日本語の問題は深刻で、長年日本で生活してきたにも拘らず、なかなか理解出来ず、特に早口の会話にはお手上げです。その他にも沢山の利己的な動機があります。例えば、私は自分に負担がかかる事には巻き込まれたくないと考える タイプですし、時折自分の学生達に対

して「どうして彼らはもっと勉強に興味を示さないのか」などと考えてしまいます。私はこういった否定的な考え方を克服すべくいつも闘わねばなりません。

三十年近く日本で過ごしてきた私は、日本人の考え方や物事の進め方というものにも随分慣れました。日本人は普通初対面同士ではお互いにたいへん無口で、それは私の学生達にも言えることです。新入生歓迎コンパの時も、最初はみんな黙っていますが、幹事が「自己紹介をしましょう」と呼び掛けるとやっとリラックスして話し始めます。

## 気取らず、正直に

小田原会議の分科会でも最初は誰もが身を固くして、無表情でしたが、一度討論が始まると、その表情からは想像もつかなかった深い内容の話に感激させられました。日本人の心の中には、外に向かって解き放されることを待っている力が存在すると感じます。しかし、様々な社会的制約により、その心の力が表に現われにくくなっているのです。私は今回小田原で、人々が正直で、友好的な雰囲気の中で互いに心を開き合う姿を見ることが出来ました。私達はどこにあっても、そうした雰囲気を作り出し、他の人々が心を開くためのお手伝いが出来る人々になれないものでしょうか。賢くなくとも、そして世界中の全問題に解答を持っていなくともいいのです。気取らず、そして自分自身に対して正直であれば、他の人々も貴方に対して正直になってくれるでしょう。なぜなら彼らは批判ではなく、理解と励ましを求めているからです。

個人に対する真実は、同様に国家に対してもあてはまる真実です。日本が他の国々に関心を持つ、そして彼らの為に最善を求める真の友人になれないものでしょうか？シュミット前西ドイツ首相は、先日シンガポールのテレビ番組で「日本はアジアに真の友人を作るべきだ」と発言しました。日本が戦争中に隣国に対して行った行為についての日本の反省の態度が十分でないように見受けられます。そこがドイツとの違いです。日本が自らの過ちに対して正直になり、そして隣国に対する思いやりを示すことが出来れば、日本は他国に信頼される、そして世界の国々がお互いに心を開きあえるような雰囲気の醸成に貢献できる国になれると私は確信しています。


# 韓国MRA国際会議（ソウル）参加ツアーのご案内

記

◆旅行期間　①63年9月22日(木)～26日(月)〔4泊5日〕
②63年9月22日(木)～28日(水)〔6泊7日〕

◆旅行代金　①120,000円　②140,000円（共に予定）
往復航空運賃、宿泊費、全食事、送迎バス代、国際会議参加費用が上記旅行代金に含まれます

◆募集人数　①A、13名（成田空港発着）
B．6名（大阪空港発着）
②21名（成田空港発着）

◆利用航空会社　日本航空、又は大韓航空

◆その他　現地ではMRA事務局員がお世話をいたします

◆申込締め切り日　8月6日(土)

参加を希望される方は詳しい資料がありますのでMRA事務局へお問い合せ下さい。

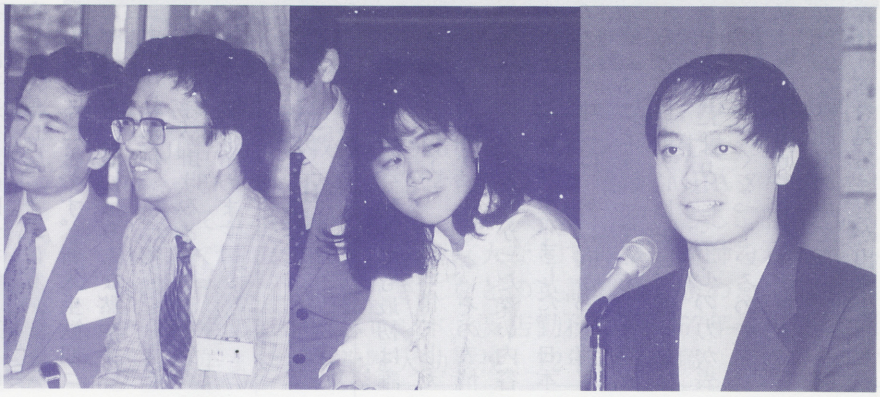
03(821)3737　担当 寒河江

★第三回韓国MRA国際会議にご参加下さい★

韓国のソウルの近郊、城南市で開催されますMRA国際会議に出来るだけ多くの方にご参加願うべく左記の要領にてツアーを企画いたしました。尚、会議の合間には、オリンピック競技の観戦、その他市内観光等の機会も設けられます。また、韓国政府要人及び産業界・教育界の代表との交流会も予定されています。

テーマ
「良心に支配された世界の創造」

■期間：1988年9月22日-28日
■会場：韓国精神文化研究院



# 発言より

## テーマ「心の国際化」

### ●もっとアジアからの情報を！

小宮泰二

昨年中国を旅し、南京大虐殺記念館で暫らく言葉を失ってしまう程のショックを受けた。同行の日本人達が記念館をバックに笑いながら写真を撮り合っていたが、周りでそれを複雑な表情で見ている中国人の感情に対する配慮のなさが日本人として恥ずかしかった。日本人が国際化と言う時、欧米の先進国が念頭にある。それらの国々に関する情報は溢れている一方、アジアの国々に関する情報はその量も乏しく正確性にも欠ける。中国で虐殺現場のショッキングな映画を見たが、日本人はもっとそういう事実を知るべきだ。国際化の第一歩はまず相手の国やその立場を知ることであり、誰にでも出来る簡単なことを家庭から始めていきたい。

（会社役員）

### ●専業主婦の自分に出来ること

中川理恵

専業主婦の自分が家の中でも出来ることは何かを考えてみた。人種的な偏見や差別する心は、生まれ育った環境や親の生き方、考え方から芽生えると思うので、親の躾がとても大切だと考える。差別をしていないか、他人を疎外していないか、そんな気配りを親として常に忘れずに、子供の手本となる生き方を示していきたい。

（主婦）

### ●難民の教育問題を一緒に考えて下さい。

メアス・チャンリープ

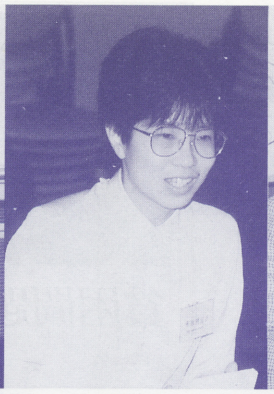
難民が日本に着くと難民定住センターで三ヵ月間の日本語教育を受けるが、たった三ヵ月では日本語も日本社会の生活状況もほとんど理解出来ない。「日本人は私達を心から受け入れてくれたのか、本当に助けようという気持ちがあるのか、仕方なく受け入れたのではないのか」など色々なことを考えて悩んだ。頭の中は自分の子供のことより難民の子供達の将来のことで一杯だ。彼らはカンボジア国内の混乱により、満足な教育を受けられなかったにも拘らず日本でその年齢につり合った学校に入れられる。英語のABCすら知らない子供達が、日本の学校で日本語の教科書を使って勉強しなければならないその辛さに子供達は毎日泣いていた。たとえ一生懸命勉強しても、基礎学力に欠けるから高校を受験しても合格出来ない。小学校の校長先生にたとえ十歳でも小学校一年に編入させて下さいと頼み、やっと理解して頂けたが、クラスメートが六歳だから、その仲間に入れないという新たな問題も生じた。又、難民ということで一段低く見られてしまうということもある。日本の方は難民になった経験がないから、助けたいという気持ちがあってもどういう風にして助けたらいいのか分からないのだと思う。どうぞ私達の問題を一緒に考えて頂きたい。

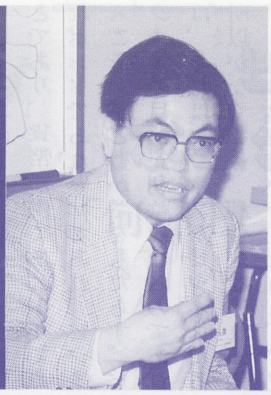
（在日カンボジア人協会会長）

### ●忘れられない母国カンボジアへの愛国心

五味ソピア

十四年前日本に短期滞在のつもりで来たが、カンボジアの政変のため帰れなくなった。カンボジア人の父は仕事の関係で帰国したまま行方不明になった。最初日本の学校が嫌いで、日本語すら覚えようとしなかったので友達も出来なかったし、逆に難民だといじめられた。当時の先生





●中央婦子が筆者。右端を持つ子供達と。

# 分科会の

## 分科会A・B・C共通

から「自分から心を開きなさい」と論されたお陰で現在の自分がある。将来カンボジアのためにお役に立てるよう色々なことを学んでいきたい。母が日本人で毎日日本語で生活しているので、恥ずかしいことだがカンボジア語を忘れてしまった。現在カンボジア語教室に通っている。二年前から国籍は日本になったが、カンボジアへの愛国心を忘れていない。日本人の中には西洋に目を向けがちで日本を嫌っている人もいるようだが、愛国心という大切なものを失わないでほしい。

（団体職員）

### ●日本人はもっと自国に誇りを持つべきだ

ブー・ダンコイ

国際化とは自分を愛し、そして他人を自分のように愛することだ。自分を愛せない人は他人を愛することも出来ないと思う。難民として日本に来て六年たつが、日本人は優秀で心優しい民族だと思う。なのに、どうせ自分達は島国根性だからと心を閉ざしがちである。日本人はもっと自国に対する誇りを持って外国人に接して欲しい。又、相手や相手の国のことを全部知らなければ付き合えないという訳ではない。まず友達になろう。

（大学生・ベトナム）

### ●通訳をしながら心が洗われた

吉田真樹

海外の方々の切々とした発言を聞きながら、自分自身腹が立ったり情けなくなったりで、涙が出そうになるような思いで通訳した。日本側参加者の方々がその訴えを心の底で受け止め謙虚にコメントしていた。このように心が洗われるような会合で通訳をする機会は余りなく、とても勉強になった。通常、仕事で疲れて自宅に帰り、子供が部屋を散らかしたりしていると、つい大きな声を出してしまうが、今回読んだMRAの本に従って逆に子供の良い点を誉めてあげたところ、いつもは聞こえないふりをする子供が抱きついてきた。母親として自分自身がもっと謙虚にならなければと思った。

（通訳）

### ●独自の制度や伝統も国際摩擦の原因に

チュー・ライキム

日本人は日本在住の外国人に日本の制度ややり方を押しつけ過ぎる。なにか問題が生じるとすぐに、貴方は日本のことをよく理解出来ていないとか、或いはこれは日本特有の制度だとか言う。確かに母国のマレーシアでもそうであるように、それぞれの国が独自の制度と伝統を保つことはいいことだが、それらが国際的な摩擦の原因になってしまうことがあることも理解してほしい。

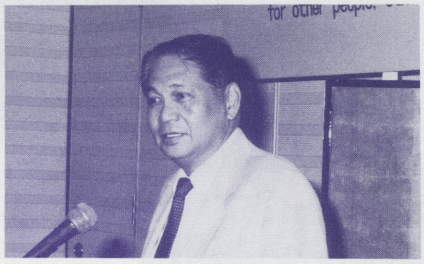
（留学生・マレーシア）

### ●同じ人間として気楽に付き合おう！

郭　英傑

自分が相手に何かして欲しいと思ったら、その相手の立場に立つという考え方が大切だ。真心で付き合えば様々なトラブルも自然に解決するのではないか。「郷に入れば郷に従う」という諺は日本にも中国にもある。異文化の接触に摩擦が生じるのは仕方がないが、理解しようとする姿勢が大切だ。相手にあれこれと指図することは却って誤解を招きやすい。日本人は国際化ということを余りにも難しく考えているのではないか。

（会社員・台湾）



# 貧困問題の解決を！

ベン・ユーセビオ

ビジネスの目的は利益を上げることであり、貨幣が円であれドルであれポンドであれペソであれ、ビジネスこそが富と豊かさをもたらす。ビジネスの目的が利益にないのであれば、それはビジネスがビジネスたる所以がなくなる。利益がなければ銀行も貸し出す金がなくなるし、ビジネスの拡大もあり得ない。投資家も満足しないだろう。

しかし、利益は同時に社会的な責任につながるものでなければならない。ビジネスから生じる利益の一部を社会に還元していくというのが私達MRAの考え方である。

得た利益を不幸な人々、或いは不幸な国の人々のために使うことが賢明である。それは単に援助を一方通行でし続けるということを意味するのではなく、援助を受ける側の自立を助け、世界市民となるべく啓蒙するということだ。貧困問題の解決こそがそのまま世界の繁栄につながる。

東京・大阪間は新幹線で僅か三時間だが、大阪から飛行機で六時間以内の地域に何百万人という疲れ切った農民達が空腹を抱え貧困に喘いでいる。先進国の養鶏場や養豚場は、飼料や薬や水が必要な時に必要なだけ、しかも自動的に与えられる設備すら持っているが、途上国の人々はこの鶏達の環境以下の生活を強いられているのだ。貧困に喘ぐ人々の問題が解決されたならば、それぞれの地域に政治的、経済的安定がもたらされ、彼らは購買力を持つ消費者となるだろう。そうして創られた市場を通して、貧しい人々の生活が向上すれば、テレビ、ラジオ、自転車、車などの消費財の需要が高まる。新たな市場が新たな生産を生み出し、収入や利益、そして政府の歳入も増加させるという循環が繰り返される。人々の収入が増え利益が増えることにより、消費と生産と利益とが新しい循環として創造される。

経営者と投資家が一緒に、何百万人というカンボジア難民、独裁政権から逃れたベトナムのボートピープル、フィリピンなどから日本に来るアジアの外国人労働者、アジアの土地を持たない農民達に対して関心を持つことが必要であろう。

MRAでは、日々を効果的に過ごすために毎朝静かな時間を持ちその日の計画を立てることを実行している。心の声に聴き、他の人々と意見を交換する。

今年初頭の或る日、この内なる声に耳を傾けた時、自分の土地を農民に与えるべきであると考えた。別にそういう法律が出来た訳でもなく、自分が農民を愛しているという理由だけでもない。貧しい農民を減らさない限り、とてつもない悲劇が祖国にもたらされると考えた私は自分自身の責任を果たすべく、家族と相談の上、自分達の所有する土地を政府に提供し土地なき農民を救うための行動を率先した。

会社役員。警察庁人事スタッフとして訓練中に、米ミシガン州マキノ島で開かれたMRA世界大会に参加してMRAを知る。以降、著名なビジネスマンとして活躍、又、土地改良省次官、バハマ政府海外投資顧問、マニラ近郊リサール州副知事なども務めた。

## 入会の御案内

社団法人国際MRA日本協会は、家庭と社会の健全な発展と世界平和の実現に貢献する具体的な活動を行なっています。その事業の充実、発展を図るために左記の会員制度を設け、より多くの方々のご加入を呼びかけています。

(1)正会員　個人　年額　3、000円
　　法人　年額　50、000円

(2)賛助会員　個人　年額　1、000円以上
　　法人　年額　50、000円以上

郵便振替口座
東京八―三八二八九
口座名　社団法人
　　国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供　②機関紙―MAJニュース等の送付　③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

- 世界家族の仲間入り
- 信頼できる人との出合い
- 新時代に必要な情報
- 心身の健康
- 問題解決の秘訣

●中央帽子が筆者。石板を持つ子供達と。

# ヒマラヤの水道タンクの記銘

## 「何が正しいのか」、ネパールで学んだこと

石田　進

### サラスワティ小学校へ簡易水道をひく

世界には義務教育も満足な教育設備もなく、多くの子供達が貧しさのため学校にも行けない国が少なくありません。十年前ネパールを訪れ、教育環境の貧しさと就学率の低さに驚かされた私は帰国後、ネパールの教育の振興に協力しようと「ネパール教育協力会」を設立しました。ネパールの青年を日本に留学させたり現地の小学校に黒板、机、地球儀、絵本、ノート、鉛筆など教育設備を贈ったり、校舎建築の資金を集め、ボランティア教師を派遣し、簡易水道を設置するなど地道な活動を続けています。当協力会は、日本全国からネパールの草の根の人々に関心を寄せて下さる八三〇名の会員の皆様方によって支えられています。

今年も休暇を利用し、代表世話人として八回目のネパール訪問を自費で果たしました。早速山頂の村へ八時間のトレッキングを行ない、翌日も当協力会の援助で完成したサラスワティ小学校への簡易水道の水源の視察のため、派遣ボランティア教師畠博之先生や村長、学校理事らと山道を登りました。この簡易水道は、山頂近くの水源から小学校までパイプを埋設したもので、途中にタンクが二ヶ所あります。当協力会がパイプ、セメント、金具などの資材を提供し、企画、設計、施工は、全て村民の労力奉仕によって賄われました。村々へ簡易水道を埋設したり共同井戸を設置する場合は、まずその村ができる限りの自助努力をして資材を集めてもらい、それでも尚不足する分を当協力会が協力するという方式をとっています。そうすることにより、完成後の管理や補修は彼等が自主的に継続して行なってくれます。また、彼等は自らの手でここまで開発できたという自信と誇りと喜びを味わい、新たな希望を見出すことができるのです。企画、施工、資材に至るまで、百パーセント外部からの贈り物ですと、村民は便利さに喜びはしますが、故障修理に際しては労賃を出さなければ働かなくなり、自主的な管理は難しくなります。たとえ奉仕する人がいたとしても、技術移転が行われていなければ修理は困難となります。そうした失敗例の残骸をネパールでときどき見かけます。ネパールに関して日本で有名な或る日本人ドクターの講演や書物での成功物語とは裏腹に、現在、それらが全部失敗しているのは、その辺のやり方にも原因があるのかも知れません。

### 畠先生との対立

さて、サラスワティ小学校簡易水道の途中のタンクは、縦横高さ各2メートルもある立派なコンクリート製のものでした。丘の上の小学校へと続く山道を歩きながら、畠先生に、「あのタンクの外壁にネパール語で（この水道は、日本ネパール教育協力会の支援によって設置されたものである）とペンキで大きく書いて、写真を撮って送ってくれませんか」と話しかけると、大阪大学で物理学と数学を修めた温厚なこの青年教師は「それは駄目です。石田先生分か

●サラスワティ小学校の子供達。

って下さい。彼らのプライドはどうなりますか」と静かに答えました。「うん、それはよく分かる。しかし、この協力会を会社に例えれば私は社長であり経営というものも考えなければならない。会員の方々に報告し、満足して頂くことも考えなければならない。その程度ならばよいではないか。是非、そうして下さい」。すると畠先生は声を強めて「絶対反対します。石田先生の立場は分かりますが、そんなことをしたら失敗します。断固反対です」と激しく反対します。私は一瞬、「石頭だなあ」と思いました。しかし、畠先生の言うことが正論であることも実は認識していたのです。二人の間に沈黙が続きました。足音以外は音一つしない静けさの中で、私は静かな時間を持ちました。

## 村の理事会の結論

雄大な自然の中で、心が静まっていくのを感じました。頭の中にMRAの四つの絶対標準が浮かび、次に「正直・純粋清潔・奉仕・愛を以て務める」という当協力会世話人心得が浮かんできました。なぜかこの時、心やすまる郷里である京都の庭園が思い出され、私の心は決まりました。沈黙を破って私は言いました。「畠先生。私の立場ばかり主張してすまなかった。貴方の方が正しいので私の主張は撤回する。しかし、製作年月日だけは書き入れるよう提案する必要はあろう」。畠先生は、ほっとした顔でそれを了承し、その日の村の理事会に提案しました。

菩提樹の大木の下で開かれていた理事会には私も招待されて同席しましたが、そこで出た結論には驚かされました。「製作年月日の記入は大切なことであり、よく教えてくれました。理事会としては、日本ネパール教育協力会と貴方方二人の名前も併せて記銘したいがよろしいですか」。私達二人は顔を見合わせるばかりでしたが、心は決まっていました。「私達の提案は製作年月日に関してのものであり、その他の記銘の有無は村の皆さんの問題なので、私達が関与するつもりはありません」。この体験を通じて私は「何が正しいのか」ということを身を以て学び、MRA精神の偉大さを体験させて頂きました。

**昭和十一年六月京都市生まれ。国立京都教育大卒。京都市立日吉ケ丘高校を経て現在、京都市立紫野高校教諭（地学）。昭和五十四年三月「ネパール教育協力会」を設立。同会代表世話人**


# ネパール教育協力会

The Japan-Nepal Educational Cooperative Society (JECS)

**代表者**：石田　進（代表世話人）　**設立年月日**：1979年3月
**本部所在地**：〒604 京都府京都市中京区西ノ京南両町92 TEL.(075)841-3917
**海外事務所**：JECS Office, G.P.O.Box No.2701 Kathmandu, Nepal
**事業対象分野**：農・山・漁村開発、教育、地域産業、環境保全
**事業形態**：資金援助、物資供給、人材派遣、人材受入れ、国内での開発教育
**活動対象国**：ネパール
**世話人心得**：①正直　②純粋・清潔　③愛　④奉仕

ネパールで医療奉仕活動をしていた或る医師から、留学生の支援を依頼されたことがきっかけとなり設立されました。「和をもって共に生きる。教育は人をつくり、村をつくり、世界をつくる」をモットーに、立ち遅れているネパールの農村部の生活向上のための「地の塩」として働く人材育成と、初等教育への支援を軸に農村の自立的開発に協力しています。

過去2年間の主な活動としては、小学校校舎建設（7校）、識字学級開設（21村）、ネパール語絵本の作製と配布（約5,000冊）、簡易水道（5ヵ村）、及び井戸（3ヵ村）の設置などがあります。又、講演会、映画会、ネパール語講習会、ネパール人留学生との交流会及び留学生支援、中学・高校生を対象としたスタディー・ツアーなど、国内の活動も活発に行なっています。刊行物としては、「ネパール教育協力会だより」（隔月）を発行しています。会員数は830名で、会費の金額は各会員のお志により自由に決めて頂く制度になっていますので、毎月でも、一年分でも、又、一時寄付でも構いません。

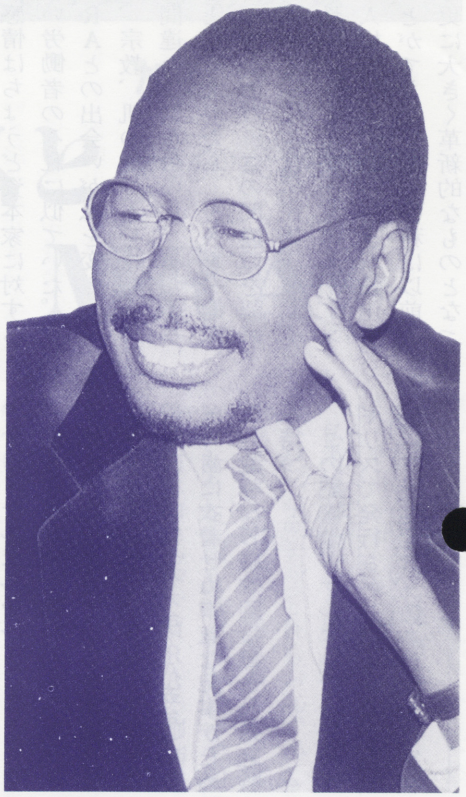
郵便振替口座　「京都-4-20502」

古切手やベルマークを集めてぜひお送り下さい。文房具に換えてネパールの学校に寄贈することが出来ます。

★皆様のご支援をお願い致します★

# スーダンが歩みゆく未来への道

アナイ・ケルエルヤン



## 北と南の対立

スーダンは北東アフリカに位置し、アフリカ大陸最大の面積（イギリスの十倍、二五〇・六万平方km）を持つ国である。エジプト、リビア、チャド、中央アフリカ、ザイール、ウガンダ、ケニア、そしてエチオピアの八ヶ国と国境を接し、紅海を挟んでサウジアラビアを望んでいる。

スーダンは二千百万の人口を抱え、北部にはアラブ系の人々、そして南部にはアフリカ系の人たちが住んでいる。北部人はアラブ系の回教徒であり、南部人は生粋のアフリカ人として土着の宗教、或いはキリスト教を信仰している。

三二年前にイギリスとエジプトから独立して以来、スーダンでは人種や宗教間の対立や差別が熾烈を極めた結果、横暴な軍事政権が誕生し、国民の分裂は一層深まった。

マスコミを通して北部系の政治家は南部人を「西洋帝国主義者達の手先、或いは危険な共産分子」と呼び、それに対して南部系の政治家は北部人を「多数派の非回教徒アフリカ人たちを抑え込み、権力欲のためイスラム教を利用するアラブ至上主義者」と決めつけ、お互いに敵愾心と憎悪を増幅させている。自らの政治的野望のために人種や宗教の違いを利用することは、外国からの借物のイデオロギーを自国民に押し付けることと同様に危険なことである。

## 再建への道

双方の政治家達と率直に話し合える機会が持てたらとしばしば願う。過去我々を統治していた者達が去ってから三〇年も過ぎた今、我々の現在の問題の責任を全て彼らに押し付けてしまうのは間違っている。

この国の今までの政治の在り方を再検討する時が来たのだ。失敗や過ちを自ら認めることができれば、他人が正しいのか或いは間違っているのかということがより明確に分かる。これまで不当な扱いを受けて来た人々に対して誠実に謝罪し、自らの過ちを認めるならば、この困難な政治状況を打開できるような奇跡が生まれ、問題への解答が与えられるかもしれない。

スーダンに隣接する八つの国々も人種、宗教、イデオロギーの対立という似たような問題に直面している。誠実、無私という明確な道義基盤の上にスーダンが再建されるならば、世界の国々の良い手本となれるだろう。核戦争を回避するために懸命の努力を続けているアメリカやソ連のような大国さえも我々に注目するかもしれない。

## イスラムの真の教え

私は回教徒そして南部人として、非回教徒、非アラブ人に優越感を抱く一部のイスラム指導者のためにイスラム教そのものが誤解されていることを大変恥ずかしく思う。「アラブ至上主義とイスラム教は表裏一体」という概念を否定する者は「真の回教徒にあらず」という烙印を押されることになるのだ。

**ある時、マホメットはアラブ人のイスラム教徒に言った。**

「アラブ人が他の人々より優れているという考えは間違っているし、白人が黒人より優れているわけでもない。イスラムへの厚い信仰を持つ人こそ最高である。私達は確かにアダムから生まれたが、そのアダムは塵から生まれてきたのだ。非アラブ人や非イスラム教徒を差別することはイスラムの真の教えに反している」

## MRAと出会って

以上のような国家的な問題だけでなく、私自身の個人的な問題に関しても率直に話してみたい。私は、南部人を未開で劣っていると見下す北の人間に対して深い憎しみを抱いていた。彼らに奴隷の子孫と罵られ、北部人全員に復讐を誓った時もある。その感情はちょうど資本家に対する貧しい労働者のそれに似ていた。

MRAとの出会いが私を変えた。人種、宗教、肌の色で人を判断していた間違いに気が付いた。そのようなことをしていたら、分裂を一層深めるだけなのだ。この間違いを認めることによって、人種、民族、宗教、そして性別を超えて、全てのスーダン人の人権のための闘いをより強化することができた。私の任務は以前よりも更に大きく革新的なものとなった。

スーダンは、統治権が外国人から我々に移ったという意味では開放されたが、貧困、飢餓、病気などの面でも真に開放されなければならない。また権力への欲望のために宗教、人種、部族などを利用し、国民同士を仲違いさせるような偏狭なイデオロギーを持ち込もうとしている人間に打ち克たなければならない。スーダンがより高い次元での解放を成し遂げなければ、一九五六年の独立以来の暴動や社会不安は今後も続き、人命が無益に失われるだろう。

私はスーダンが恐れや憎悪から解き放たれ、国籍、人種、宗教を異にする人々が共存できる国となる日の到来を信じて止まない。

アナイ・ケルエルヤン

南スーダン地方のバハル・エル・ガザルで発行されている英字週刊誌「ヘリテイジ」の編集長。ヌメイリ軍事政権時代(六九年～八五年)に、その歯に衣着せぬ率直な記事がために、裁判なしに四回投獄された経験を持つ。

この記事は、ケルエルヤン氏がイギリスで発行されているMRA月刊誌「フォー・ア・チェンジ」に寄稿したものを訳した。

IT'S ABOUT TIME...

FOR CHANGE

THE NEW INTERNATIONAL MONTHLY MAGAZINE

定期講読受付中

●フルカラー16ページ

●世界中の情報をすばやくあなたに

●ニュースマガジンのニューウェーブ

「フォー・ア・チェンジ」定期講読ご希望の方は住所、氏名、職業、年齢を明記の上、希望する講読期間の料金(3ヵ月＝￥1,000 1年＝￥4,000 ＊共に航空郵便代込み)を郵便振替(口座番号：東京8-38289)、又は現金書留にて下記の住所にお送り下さい。

〒113 東京都文京区千駄木4－13－4
社団法人国際MRA日本協会
「フォー・ア・チェンジ」係

MRA文化講演会

加藤シヅエ

# 私とMRA

明治30年3月2日東京都本郷区西片町に生まれる。大正3年女子学習院卒。同年石本恵吉男爵と結婚。大正10年ニューヨークのバラード・スクール卒。生涯の師、産児制限のマーガレット・サンガー夫人と出会う。後に離婚して昭和19年加藤勘十氏（元社会党代議士、元労働大臣）と再婚。21年社会党より衆議院議員東京2区最高得票で初当選。以来、オシドリ議員と呼ばれ、衆参あわせて28年間、政界で活躍した。31年参議院議員選挙全国区に第1位で当選。49年政界を去る。54年夫勘十氏逝く。主な著書に、「ある女性政治家の半生」、「思い出のふる」、「ふたつの文化のはざまから」。日本家族計画連盟会長、家族計画国際協力財団副会長、社団法人国際MRA日本協会顧問。91歳。

## MRAとの出会い

私の経歴は多岐多様にわたっていますが、今思えばどれもお恥ずかしいことばかりでした。その恥ずかしいことをしていた私の目を初めて開いて下さったのが、MRAの創始者であるフランク・ブックマン博士（注1）でした。

戦後間もなく、相馬雪香さんのご紹介により、アメリカのミシガン州マキノ島にあったMRAセンターに招かれ、ブックマン博士にお会いすることが出来ました。

その当時は日本も貧乏でしたから外貨も手に入りませんし、外国へ出かけるなどということは特別中の特別の事でした。

戦後、婦人代議士第一期生として、三十九名の女性代議士が誕生いたしました。それ迄参政権すら与えられず抑圧されていた日本の女性が、参政権を得た途端に代議士でございます、衆議院議員でございますと三十九人も白亜の殿堂に登ってきました。

その中の一人であった私は、自分はもしかしたらよっぽど偉い人間かしらなどと考えていました。あの赤い絨毯を踏んでしまうと、誰でも自分が偉くなったと思い違いをしてしまうんです。ことに議員を長い間やっているとさらに思い違いをする事が多く、私などそのいい例でした。それに私は欧米も度々旅行しているし、英語にも通じているんだから、アメリカに招かれるのは当然の事くらいに思って出かけました。

国際会議と聞かされていたので、さぞかし色々な国々の代表が参加していて、世界の情勢を知るいい機会と思って行ってみると、確かに白いのから黄色いの、黒いの、真っ黒いのまで沢山の人々が世界中から集まって連日会議を開いていました。どんなにか珍しく素晴らしい話が聞けるのか、そして沢山の知識を吸収してより利口になれるのかとワクワクしていたのです。

ところがおとなしく聞いていると、顔の色こそ違え出て来る人出て来る人、言う事は皆似たり寄ったりでつまらない話ばかりしているんです。自分はいつどんな風に不正直でこんなウソをついたかとか、家内にこんな秘密を持っていたかとか、自分がどんなにつまらぬ人間であったかやっと分かっただとか、一体何を言っているのかと思いました。立派な方々がわざわざ海を渡ってここまで来て、家内に隠し事してましたなんていうつまらない話ばかりして、それをまた聞いている人も聞いている人だし、こんな会議を主催する人もどうかしていると思いました。

星島二郎（注2）先生ご夫妻と一緒でしたので、ご夫人とよく、「この会議って一体何を話すところなんでしょうね。二言目にはチェンジ、チェンジ。一体チェンジって何なんでしょう。あの言葉を聞くとゾッとしますね。」と話して、一刻も早く逃げだそうなどということばかり考えていました。

## 心の耳を聴く

そうしているうちにブックマン博士に直接お会いする機会があったので、丁度持っていた聖書の裏表紙に何か記念になる言葉を書いて下さいとお願いしたら、それでは暫らく預かっておきましょうと言われました。数日後に戻ってきた聖書には、「あなたは自由という事を知っていますか？　この聖書をよく読んで自由の身になりなさい」と書いてありました。

日本の女性はもう自由の身になったというのに人を馬鹿にするのも程があると思いました。ましてや国会議員の私が、自分を自由の身でないなどと思っている訳がありません。博士の言われる自由という言葉の意味がどうしても理解出来ませんでした。

ブックマン博士は普段はとぼけたような顔をした方ですが、他人の心の中が見える素晴らしい、そして恐ろしい目を持っていらっしゃいました。博士は、この大変傲慢な女は何かに心を縛られていて自由でないと考えられてその言葉を書いて下さったらしいのです。

さて、国際会議も終わりほとんどの参加者は帰ったのですが、ごく小数の人達が残され、私もその中の一人でした。トレーニングを施せば、将来ちょっとは社会のお役に立てるだろうという人間が残されたと聞きました。

マキノ島の教会で静かな会合が開かれました。そこにフランスのイレーヌ・ロー(注3)さんというご婦人がいたのですが、その方はフランス社会党の婦人部長という立派な経歴を持った方で、社会運動の指導者として大変な雄弁家でもありました。パリがヒトラーに占領されていた時に、息子がナチスに拷問を受けたり色々とひどい目にあいながら耐えてきた彼女にとって、ドイツという国、そしてドイツ人は絶対に許せない存在でした。ドイツの事を考えると、心が憎しみで燃え上がるような思いがしたそうです。自分の祖国を蹂躙され、息子を目の前で拷問され、どうして許せるでしょうか。

ブックマン博士が彼女に、「これからのヨーロッパ、そして世界の平和を求めるならばフランスはドイツと握手をしなければならない」と言うと、「自分達がドイツのためにどんなにかひどい目にあったのか知りもしないくせに、いまさら握手をしろなどとこんな事を言うのがMRAならば、自分はもう帰る」と言って外へ出て行ってしまったというとても強い女性です。

しかしブックマン博士から、ヨーロッパの再建はドイツを抜きにして考える事は出来ないとこんこんと説得され、とうとうドイツ人を許したのでした。このような草の根のチェンジというものが、その後の独仏間の和解につながっていき、今日のヨーロッパの繁栄の基礎としてあるのです。

そのイレーヌ・ローご夫妻がステージに立って、静かに語り始めました。元海軍の軍人だったというご主人は、「女房が生意気で、いつも指導者ぶっているのが気に入らなかったが、よく考えてみたら、妻のしている仕事は本当に正しいことなのだと気づき、妬みや憎しみの感情を抱いていたことを妻に謝罪した」と話すと、イレーヌ・ローさんが、「夫は凡人で、ただ黙々と働くしか能のないつまらない男だと考えていた。しかしMRAを知ってから、人をそんなふうに見下すことは間違っていることを教えられた。夫に対して大変傲慢な態度をとっていたことを反省し夫に謝ってからは、本当に信頼、尊敬しあえるような夫婦になった」と応えました。

私はその心からほとばしるようなお話を聞いて初めて、「心の声」というものを知りました。

## 義理の娘との確執

たいがいの人は「自分は盗みを働いたこともないし、殺人を犯した訳でもない。真っすぐな道をちゃんと歩いて、税金もちゃんと払って暮らしている。家庭の中でも自分の仕事はキチンとやっている。そんな自分の一体どこが悪いのか」と言われます。

●右から加藤さん、イレーヌ・ロー夫人、フェルナンダ・バルボア夫人（汎太平洋東南アジア婦人連盟会長）。昭和34年5月、大津市で開催されたMRAアジア会議にて。

私もあらゆる艱難辛苦をくぐりぬけて一生懸命ここまでやってきて、二人の息子も立派に育てたし、加藤勘十(注4)という労働運動の指導者と再婚してからは、夫も大切にしたつもりでしたが、家庭内に困った問題を抱えていたんです。

それは私の義理の娘、つまり加藤の先妻の娘のことでした。十三才で母と死別した娘は、父が新しい母を迎えるというので大変に喜んでいた訳です。ところがその母たるや、それはこの私ですが、傲慢な女だったんです。

母性愛というものは本能的な愛情であって、自分で生んだ子供であれば他人から言われなくても愛情が湧き出す、それが子供を育て愛する母性愛というものなんです。

そういうプロセスを経ないでいきなり母という立場に立っても、自分のお腹を痛めて生んだ子供と同じように扱う、同じように愛情を注ぐなんてことはできないのが当たり前なんです。

ではどうしたらいいのか。

私は「母という立場で、教育や躾とか色々面倒を見て母親としての責任を充分に尽くせばいいんではないか、でも本能的な愛情を生みの子と同じようにその娘に注ぐなんてことは無理なことだ」なんという風に自分で勝手に考えて、それが絶対に正しいと思っていたんです。

それで迷惑したのが娘です。

新しいお母さんがどんなにか可愛がってくれるかと期待していたら、少しも可愛がってくれず躾のことばかり話している困ったお母さんだったんです。

お母さんの方は自分が偉いつもりですから娘のそんな気持ちにはちっとも気が付かず、この子は本当に野放しで育ってしまったからあれもこれも教え込まなければなんてことばかり考えていたのですが、やはり十三才かそこらの娘の求めていたのは母親の愛情でした。私はその愛情を注がなかった女です。

そんな親子の気持ちのズレが段々大きくなり、とうとう娘が家を出るという大変に不幸な事態になったのは次のようないきさつからでした。

ちょうどマッカーサー司令部が東京に出来た頃、司令部のジープに乗った将校が私の家に来て、「マッカーサー司令部は、戦争に反対して軍部と闘い多大な犠牲を払った貴女のご主人加藤勘十さんを非公式な顧問として迎え、日本がこれから本当に民主主義になるためには労働問題をどうするかということについて、色々とご意見を伺いたい。貴女も戦争に絶対反対した人だから、国防婦人会と愛国婦人会しかなかった日本に本当に自主的な婦人会をどうやって作るかについての意見を聞きたい」と言いました。

これは有り難いことだと、それに少しばかり英語も話せたもので、偉そうな顔をして司令部に出入りして、お役に立っているつもりでやっていました。

そんな訳で、ジープが家に来るとか制服のアメリカ軍人が来るということが、娘の目にはとてつもなく大変なことに映ったらしいのです。年端もいかない娘でも、これからは国際的にならなくてはいけない時代になったんだなと考えたらしく、自分もお母さんの真似をしようと思ったのか、沢山いた若いGIの一人と国際交際を始めたという訳です。

ある晩、私が遅く帰宅すると、応接間の明かりがこうこうとついていました。お客様かなと思って覗いて見ると、娘がGIを部屋に招き入れてデートしていたんです。

私は本当にビックリしました。良家の娘が親の知らない男と交際するなんてとんでもないことで、私はもうかんかんに怒りまして、娘を叱り飛ばし、そのGIにも「あなたは親

(注1) **フランク・ブックマン**

1878〜1961

一八七八年アメリカ・ペンシルバニア州に生れる。一九二一年、ワシントンの軍縮会議を傍聴し、「いかに優れた平和計画も人間の心を変えない限り無意味である。むしろ争いの原因ともなる」ことを悟り「新しい人間づくりによる、新しい世界づくり」を目指す運動を興そうと決心した。

第二次世界大戦勃発直前の一九三八年、軍備ではなく道義と精神の再武装こそが真に世界の平和と安定をもたらすものであるとの確信を得、MRA運動を提唱、全世界でその活動を推し進めた。

日本にも一九二五年以来度々来日し、政財界の指導者と広汎多彩な交友関係を築いて日本の国際社会復帰の橋渡しに尽力した。その業績に対して日本政府は一九五六年、勲二等旭日章を贈り、フィリピン、中国、タイ、ビルマ、イラン、ギリシャ、ドイツ、フランスもそれぞれ勲章を贈ってその功を賛えた。

一九六一年、ドイツのフロイデンシュタットで八三年の生涯を閉じた。

(注2) **星島二郎**

1887〜1980

(ほししまにろう) 明治二十年、岡山県倉敷市に生まれる。東京帝国大学卒業後、犬養木堂の秘書を務め、政治を学んだ。後に弁護士となり、片山哲元首相と東京・日比谷に法律相談所を開設。

大正九年、三十二歳で岡山二区から初当選、以来、昭和三十八年の第三十回総選挙まで連続十七回の当選を果たし、「憲政の神様」尾崎咢堂の二十五回連続当選に次ぐ記録を作った。その間、商工相、国務相、衆院議長、サンフランシスコ講和会議の全権委員などを務めた。

昭和三十二年、フィリピンのバギオ市で開かれたMRA大会で同行の加藤シヅエ氏らと日本が朝鮮統治時代に行なった圧制について謝罪した上で、尹民議院外務委員長ら韓国側代表と連日会議を行なった。これが後の日韓正常化の礎となった。又、統治時代に日本に持ち込まれた韓国文化財の返還運動にも務め、自らも李朝が所有していた狛犬等を返還して範を示した。

昭和五十五年一月、九十二歳で没す。

に断らないでなぜ家にズカズカと上がったのか。あなたの名前と上司の名前をここに書きなさい。こんなことは二度と許さないからこの家へは来るな！」と、厳しい態度でそのGIを追い出し、すぐに上司に「あなたのところのGIが娘を誘惑しに来たのでえらく迷惑している。あんなGIはどこか遠くへ飛ばしてくれ」と手紙を書きました。そのGIは可哀相に青森あたりに飛ばされたそうです。

私は胸がスーとして、母親として立派にやったなんて思っていたんですが、娘はすっかり心を痛めてしまい、こんな厳しい母と一緒にいたのではとてもたまらんと思ったのか、遂に家を出てしまったのです。私は国会議員として、自分の家庭でそんな他人に聞かれたらまずいような話があるということは非常に困ったことだとは思いましたが、自分は母親としてやるべきことをやったんで、やっぱり家を出ていった娘の方が悪いんだと考えていました。

それがマキノ島で、「なるほどこれが人の本当の心の中から出て来る声なのか、その心の中から出て来る声と、自分が頭の中で色々とデッチ上げた知恵によって作り上げた声とは全然別のものだ」と気付きました。

娘がその側にいられないような厳しい母親であったことに遅蒔きながら気が付いたのです。

もしこれが、どこかの誰かから頭ごなしに、「あんたのやったことは間違っている」などと言われたのだったら、私はどこまでも反抗したことでしょう。

ところでマキノでは、「心にある良心の声というものを聴けば、本当に正直になることが出来る。そしてもし、何か改めなければならないことがあれば即座にそれを改めて、気持ちの上で生まれ変わる。そうすることによって心のあらゆる束縛から自由になれる」と色々な方々が言われました。

ブックマン博士が言われた「自由になる道」とはこういうことなのかと思いました。

そこで私も教会の演壇に立ち、「実は私も故国に残した家族との間にこのような問題を抱え、自分のいたらなさには少しも気付かず、相手だけが悪いんだという立場を今日に至るまでとっておりました。これは大変不遜なことであり、大きな間違いであったことに気が付きましたから私はこれをチェンジします」と言いました。

あれほどイヤだった、身震いするほどイヤだったチェンジをとうとうしてしまったのです。

偉そうな顔をしていた婦人議員ともあろうものが、「私は本当に至らない人間でした。心を悔い改めて新しい人間として立ち直りたいと思います」と、本当の心の声を人様の前で披瀝（ひれき）する、それは大きな勇気のいることであり、同時に恥ずかしいことでもありました。涙がポロポロと出てきたんです。

そうしたら、そこにいた皆さんも、あの傲慢な女性がよくあそこまでしおらしく自分の非を改めたものだと思って下さったのか、私が涙をこぼすと同時に、会場の方々も泣いて下さった。

あれが私の人生のお葬式の日だったんです。

マキノ島の小さな教会で私は過去の私にお葬式を出しました。

## 感動できる日々を送るために

このような体験を色々な方が世界中でやっておられるんです。仏教で言えば目の鱗（うろこ）が落ちるとでも言うのでしょうか、心の中の間違いを勇気をもって正直に認めるということは、自分は別な人間になると決意を

（注3）**イレーヌ・ロー**

1898～1987

一八九八年生れ。第二次大戦中、反ナチ抵抗運動の医療班を組織して闘った。三男をゲシュタポに捕えられ拷問され、フランス人として、また母親としてドイツとドイツ人を心から憎んだ。

戦後間もない一九四七年、スイスのコーで開かれたMRAの世界大会でドイツ人と会い、直ちに帰ろうとしたが、ブックマン博士に「ドイツ人を除外してどうやってヨーロッパの融合と再建が出来るのか」と説得され、三日三晩、寝ずに悩んだ後、ドイツ人を許し、彼らに対する憎しみを謝罪した。その後、独仏友好の回復に尽力し、後のEC設立のきっかけを作った。マルセーユ選出の国会議員・社会党中央執行委員等も務め、融和のメッセージを携えて世界各国を訪問した。

一九八七年、八八歳で没する。

（注4）**加藤勘十**

1892～1978

（かとう かんじゅう）明治二十五年、愛知県丹羽郡に生まれる。日大法科中退後、東京毎日新聞入社。

昭和十一年、第十九回総選挙で東京五区より立候補し、全国最高点にて当選する。昭和十九年、石本シヅエと結婚する。昭和二十年、日本社会党結成に参加し、同時に中央執行委員となる。

昭和二十三年、芦田内閣の労働大臣就任。昭和二十七年、MRAの招待により渡米。昭和三十年、MRA国際親善使節団に加わって、台湾、フィリピン、タイ、ビルマを歴訪。マニラ市内の大学の講堂で、観衆の激しいヤジを浴びながらも〝新しい日本が目指そうとしている道義立国への道〟を割れ鐘のような声で訴え、過去への謝罪を行なった。途端に千数百人の観衆は水を打ったように静かになり、次の瞬間、万雷の拍手が堂を揺すった。戦後の日本と東南アジアの和解の礎が築かれた一コマである。昭和四十四年、衆議院議員を辞し、後進に道をひらく、翌年、勲一等瑞宝章を授けられる。

昭和五十三年、八十六歳にて没す。

したということです。そのような瞬間を持てるのがMRAの本当の真価なんです。

MRAは、ああしなさい、こうしなさいなどとは言いません。ただ、そのような心情に到達するにはどうしたらいいかということを「絶対正直」、「絶対純潔」、「絶対無私」、「絶対愛」という四つの絶対道徳標準というものを掲げて示しています。

この絶対が厄介なんですね。

この絶対が付いていなければと言う人がよくいますが、ブックマン博士はこう言っておられます。「電球をつける時、スイッチを八分通り回してつきますか？　最後まで回して初めて明かりがつくでしょう。人間の心も八分じゃダメ、絶対は絶対です。少しばかり正直で少しばかり嘘をつくというんじゃダメなんです」。

日本語で道徳というとずいぶん難しく聞こえますが、その辺りは自分で上手に解釈すればいいんです。ただ、絶対を否定してしまうとせっかくそこ迄チェンジした値打ちが無くなってしまうんです。

四つの基準とは神様であり仏様なんです。

私は毎朝その基準に心を照らしながら、心の糧になるような本を三冊用意してありますので、それを必ず読むことにしています。その一冊である「A New Day」という本には、旧約聖書や新約聖書の言葉、或いは宗教家や労働運動指導者達の残した名言が書いてあります。真理を追求してやまなかった人々の考え方、生涯というものがとても参考になります。朝の十五分間もあればいいんです。そうして心を掃除してから一日をスタートするんです。そういう生き方をすると日々の出来事に素直に感動できるようになります。

日本人は感動するという事に慎まし過ぎて、喜怒哀楽を余り表に表わしません。ロサンゼルスオリンピックの入場式の時、アメリカの可愛い健康的なお嬢さんがニコニコしながら、そして各国の選手団がにこやかに笑みを浮かべて入場して来ましたね。ところが我がジャパンといえば、皆今まで喧嘩していたような怒ったような顔をして、あれを真面目な顔だとでも思っているんでしょうか、あんな顔をしなくてもいいんです。

事をそんなに難しく考えて無表情になるんじゃなくて、表情を豊かにして、嬉しい時、悲しい時は心を動かしていいんです。心がきれいだとそれが出来るんです。私はそれでこそ生き甲斐のある人生だと思うんです。

前回、ワシントンでレーガンさんとゴルバチョフさんが会談した時、あのお二人の言葉を聞かれましたか。それぞれのお話の中に、その場に最もふさわしく、最も感動すべきことがちゃんと入っているんです。私はあの夜テレビの前に座って、この世界中の人々が関心をもっている事が話されているのに心を奪われていて、気が付いた時は朝の五時になっていたんですが、全然眠くもないし疲れてもいないんです。

今、世界が平和に向かって前進しようと苦悩しているんです。これまで全然相容れなかった国の指導者が会って、人類をなんとか核の恐ろしさから開放しようとしています。努力に努力を積み重ねても、これはもうダメだと思って途中で投げ出したくなった時もあった事でしょう。

私はテレビを見ながら、世界に平和をもたらそうと大変な苦労をしながら大きな善意をもって努力している人達がやっぱりいるんだなと思いました。

私自身、もう年だからこの辺りでいい加減にしようかななんて思うこともあったんですが、幾つになってもいい加減にしちゃいけないんだと思いました。良い事のために最後まで、自分の健康が許す限りの努力を積み重ねて歩いていくことが出来れば、本当に生き甲斐のある人生だと思うのです。

## お婆ちゃんの私にできること

今の私は何の地位も背景もないただのお婆ちゃんですが、そのお婆ちゃんに一体何が出来るのかといつも考えています。

例えばどなたかが本当に沢山の人のために役立つことをしているのをテレビなどで知った時は、黙っていないでその方に手紙を書くことにしています。

私から手紙をもらっても年を聞いたらびっくり、ガッカリするとお思いでしょうが、そうでもないんですよ。

最近、どんな人に手紙を出したかというと、あのココム違反という事を東芝機械がやって、アメリカの海軍がえらく迷惑しましたね。日本人は日本を一生懸命助けているアメリカが迷惑をしても、ココム違反まで犯してまで金儲けをしたいのかと怒った訳です。裏には色々と錯綜した事情もあるのでしょうが、簡単に言えばそういう事でしょう。

それでなくても日本は金持国、米

国は赤字国という事もあり、腹も立った事でしょう。

とにかくジャパン・バッシングという事で日本が叩かれ、アメリカ中が日本は憎らしい、けしからんと怒っているその時に、田村通産大臣が政治家としての責任を果たすという考えで、敢えてお一人で敵陣に入って行かれた。

それが一体どの位の効果があったかは知りませんが、謝ることは謝り、説明することは説明して帰って来た訳です。私は、「田村さん、貴方は本当に偉いです。こんなに憎まれている最中に、敢えて敵陣に乗り込んで行った貴方は政治家として立派です」と手紙に書いて大臣宛に送ったんです。大変に忙しい方だから読まれるかどうかも分からないし、たとえ読まれたにしても返事なんて期待してはいなかったんですが、三日目に大臣から巻紙に毛筆の返事が来たんです。

「貴女からお手紙で激励を頂きまして有難うございました。私はアメリカで散々小突かれ、日本に帰ってまた小突かれて、本当に沈んでいたところに貴女から誉めて頂いたんで本当に嬉しく思いました。おかげ様ですっかり元気になりましたのでこれからまたうんと働きます」こんなお返事を頂いて私は本当に嬉しく思いました。人間やっぱりノーベル賞は貰えなくても、自分が真剣に命をかけてやった行動を認めてもらうという事は本当に嬉しいものなんです。

細かく心を配るということがMRAの値打ちなんで、MRAというのは心の隅々に暖かい血を通わすということです。私はMRAで心をきれいにして毎日意義のある生き方をさせて頂いております。皆様もどうぞお試し下さい。ご清聴有難うございました。

（文責　事務局）

●ブックマン博士（右）を前に、韓国代表（左の二人）と一緒にスピーチする加藤さん。1957年6月、マキノ島のMRAセンターで。

## 事務局近況

●MRA発足五十周年という記念すべき年に行われる今夏のコー世界大会は、去る七月八日から十三日まで開催された「地中海会議」を皮切りに、八月末の「日米欧財界人円卓会議」、「産業人会議」まで約五十日間にわたって開催されます。日本からも多数の方々が既に参加中、或いは参加されます。その体験や感想を聞かせて頂く報告会を十月六日に東京の全郵政会館にて開催の予定です。お気軽にご参加下さい。

●七十年近くにわたり世界や日本の家族計画、女性の地位向上運動を通じて人口問題の解決に向けて貢献してきたことが認められ、加藤シヅエさんに去る六月二十七日、国連人口賞が贈られました。ニューヨークの国連本部で行われた受賞式には、高齢の加藤さんに代わって出席されたお嬢さんのタキさんが、デクエヤル国連事務総長から賞状と金メダル等を受け取られました。本当におめでとうございました。その加藤さんの心の糧となっているMRAとの出会い、そしてチェンジの体験をMRA文化講演会で大いに語って頂きました。（本号十九ページ参照）

●近年の円高の影響により海外、特にアジアから日本でのMRA国際会議への参加が困難になっております。そこでその援助のための資金の一助にとチャリティーバザーを十二月三日（土）に開催いたします。ご家庭でご不要の品（但し、未使用）がございましたら、ご提供を賜りたくお願い申し上げます。

**「MRAの歴史」のビデオ（ベータ VHS）**

ができました。

ダビングを2,000円（送料込）で承ります。

詳しくは事務局までお問い合せ下さい。